

## 丸山眞男文庫の課題

図書館館長・丸山眞男文庫準備委員 室 伏 信 助

第一回丸山眞男文庫記念講演会で「丸山眞男の世界」を講じられた本学元学長の隅谷三喜男氏は、丸山氏のように没後に世評が漸増した例は斯界では稀だと述べるとともに、氏の学問のなかに理性では律し切れないすぐれた感性があると指摘された。この指摘はすでに大江健三郎氏にもあつて、丸山氏の文体がいわゆる学術論文の枠を乗り超えるものを持っていると論じている。

しかし、実はそのことが丸山学の晩年の成果であつたはずの思想史学の大成に滞りを与えたとすれば、丸山学の課題の一つに、学問と感性との相関という興味ある対象が残されていることは疑いない。そして、その感性の具体例として、氏の人生の過半を覆うとされる音楽との関わりが、思想史学との不可分の関係のなかで捉える必然性を抱えていることにもなる。

しかし、この問題はある意味で未開拓の分野に属するのではないか。なぜなら、この分野にまたがる能力の保持は、きわめて困難であるば

かりでなく、その研究資料自体がまだ未公開に属する現状でもあるからである。膨大な音楽関係資料のうち、いわゆる書籍に関わるものは、丸山眞男文庫の設立とともに本学に帰属したが、多数の録音資料——レコードや各種のテープ、CDやLDなど、その蒐集の意図や目的の裏付け、そして何よりも特徴的な、それらに加えられた手書きのメモや評言などは、研究対象とする枠外の存在として文庫には入っていない。さらに言うなら、それらを丸山氏が生前再生していた装置——いわゆるオーディオ関係の機器等は、ご自身も弾かれたというピアノも含めて、生前のままご自宅に保存されている。

丸山眞男研究が究極にたどる道の一つに、上述の課題があるとすれば、その保管運用に新たな方法が求められねばなるまい。関係各位の熱意と努力が期待されるのである。

(日本文学教授)

『東京女子大学学报』五五三号、二〇〇〇年十一月号所収



音楽に耳を傾ける丸山眞男氏